飼主と愛犬のための

家族としての犬のしつけ

～愛犬と心を通わすためのアドバイス～

2017 年版

家庭犬しつけアドバイザー

大津　邦生

飼い主と愛犬のための

「家族としての犬のしつけ」

【目　次】

１．「家族としての犬のしつけ」とは　(P2)

２．犬を飼う前に（P2～）

犬を飼うための５つの約束

３．犬の体と生態・習性　(P3～)

犬のルーツ、感覚器、睡眠と休息、マーキングと発情周期、犬の挨拶とコミュニケーション

４．犬の種類　(P5～)

５．犬のライフステージ　(P6)

犬の年齢換算表

６．子犬を迎える時　(P6～)

犬を飼うために必要な道具・写真

７．犬の社会化　(P7～)

社会化期までに経験させること、社会化や訓化不足の弊害、幼犬期の社会化とワクチン予防接種の関係

８．最初に教えること・しつけのヒント　(P9～)

クレートトレーニング・トイレトレーニング・解説図解、愛犬と楽しくコミュニケーション

９．犬の気持ち（Ｐ13～）

オペラント条件付けとは、犬のきもち図解

１０．家庭犬のしつけ　(P14～)

愛犬と飼主に必要なこと＆図解、解説（①社会化　②散歩・運動・休息　③信頼・尊敬できる飼い主、④褒美と罰）、叱る前に何が正しいことなのかを教える、しつけの基本法則図解、上手な褒め方と叱り方のポイント、罰を与えることの問題点、罰を与えるための条件、罰を与えずに済む環境整備、お留守番サークル図解＆解説、母性愛の弊害

１１．しつけ方の具体例(P21～)

噛み癖、咬みつきの抑制、飛びつき、くわえた物を渡す、拾い食い、お散歩での引っぱり、吠える、車酔い・車嫌い、落ちつかせる、愛犬に言葉（単語）を教えよう

１２．犬の健康管理　(P25～)

食事の管理、お散歩の効用、予防接種・フィラリア予防、日常の健康管理、ブラッシング・シャンプー、避妊と去勢、犬の洋服とアクセサリー

１３．飼い主としてのマナー　(P27～)

排泄物の処理、放し飼い、ノーリード、お散歩のマナー、飛びつき・むだ吠え、他犬との挨拶、生理中のお散歩、抜け毛の処理

１４．まとめ　(P28～)

＜資料・参考文献＞（P30）

１.「家族としての犬のしつけ」とは

皆さんは犬の「しつけ」と「訓練」を同じように考えていませんか？

「しつけ」と「訓練」は違います。

「しつけ」とは、家庭でのマナーや社会のルールなどを教えることです。

皆さんがご存知の警察犬、麻薬探知犬、災害救助犬、盲導犬、介助犬など特別な役割を担う犬、またアジリティなどの競技会に出場する犬などには正確さやスピード、忍耐力などの高度な能力が要求されます。そのために行われるのが「訓練」です。

しかし、一般家庭で家族の一員として暮らす犬たちにそんな訓練が必要でしょうか？

ほとんどの犬の飼い主さんは、愛犬が家族の一員として人間社会のルールやマナーを守り、誰からも愛されるフレンドリーな犬として、飼い主にも犬にもストレスがなく、互いに幸せに暮らしたいと望んでいると思います。

でもその為には、他人に迷惑をかけたり不快な気分にさせないよう、飼い主であるあなたが自分の飼い犬に人間社会のルールやマナーを教えなくてはいけません。

私たち人間でも地域や国によって、気候風土や歴史、宗教などが違えば、言語や服装や食べ物だけではなく、社会のルールや生活習慣などが異なるため、お互いの文化や習慣を理解するのには時間が必要です。

ましてオオカミを先祖に持つ犬は外観だけではなく、その本能や習性が人と大きく違っているのは当然なのだ、ということを理解しなくてはいけません。

犬を人に例えれば、知能は２～３歳程度で言葉は話せないが、声や表情、ボディーランゲージなどで自分の意思を伝えることが出来ます。また手足で物を掴むことは出来ないので口で咥えます。そして寿命は１５年前後しかありません。

でも犬の優れた嗅覚や聴覚、暗闇でも見える視覚、高い運動能力などは、私たち人との生活の多くの場面で役立ってくれています。

犬は一番古くから人のそばで暮らしているため、人の表情や目の動き、声のトーン、態度やしぐさなどを観察することで、人の感情（喜怒哀楽や不安など）を判断したり、行動を予測する能力が他のどんな動物よりも優れています。だからこそ、地球上の暑いところから寒いところまで人が暮らすところには、必ず犬が居るのです。

飼主さんがこのような犬の本能や習性、能力、犬種の特性などを十分理解し、人間との暮らしでストレスをためないように、犬本来の本能的行動などを認めた上で、飼主家族にも愛犬にもストレスがなく、楽しく暮すために必要な事、それが「家族としての犬のしつけ」です。

２．犬を飼う前に

犬を飼うことはとても素晴らしいことですが、犬はあなたと同じように心を持った生き物です。なぜ犬を飼いたいのか、飼う前に家族でよく話し合ってから決めて下さい。

○　楽しい事だけではなく、大きな責任が伴うことを理解していますか？

犬が健康であれば、寿命はおよそ 15 年前後です。あなたは最後までお世話ができますか？
毎日の食事やお散歩、遊びや運動、健康管理などに時間やお金をかける余裕がありますか？
犬が安心安全に過ごせる環境を確保できますか？　犬を飼うのは室内ですか、外ですか？
外で飼えば、犬は吠えやすくなりますが、吠えても近所迷惑にならない環境ですか？

飼育環境やしつけ方次第で、犬は天使にも悪魔にもなりますが、あなたは適切なしつけ方についての学習をすることができますか？
以上のことに関してご家族全員の理解と協力が得られますか？

○　何処で求め、どんな犬を飼いたいですか？

ブリーダーやペットショップなどから購入する場合は、評判の良い信頼の出来るところを選びましょう。また子犬の場合は、親兄弟と２か月程（法律では 56 日）一緒に暮らした経験が重要ですので、それよりも早く販売するような業者はおすすめ出来ません。
他にも、近くの動物愛護センターやボランティア団体、犬を飼っている知人などに譲渡犬がいないか相談するのも良い方法です。また子犬か成犬か、小型犬か大型犬か、オスかメスか、どんな犬種か、などとともにあなたの住環境、家族構成、ライフスタイルなどを考え、家族と十分に相談し納得した上で決めて下さい。

＜犬を飼うための５つの約束＞

1. 犬の生態や習性、犬種の特徴などを正しく理解すること。
2. 人にも犬にもストレスのない飼養環境を用意すること。
3. 苦痛やストレスを与えない、正しいしつけを行うこと。
4. 適切な食事と健康管理を行い、最後まで家族の一員として養うこと。
5. 貰い手のない不幸な子犬を無くす為にも、無計画な繁殖を止め避妊や去勢を考えること。

３．犬の体と生態・習性

人間は実用的な目的のために、犬が本来持っていた行動特性や外観を、選択交配によって強めたり、弱めたりして現在の多種多様な犬種（400 種類以上）を作りました。グレート・デーンからチワワまで、犬ほど大小さまざまな形態を持つ動物は地球上には存在しません。また人と暮らすようになった犬はオオカミと異なり、環境適応能力に優れているために地球上のいたるところで生存し生活しています。

＜犬のルーツ＞

犬の祖先はオオカミだということは最新のＤＮＡ分析によって明らかになっていますが、オオカミから分化して人間が家畜化した時期に関しては現在三つの説があります。

約３万２千年前に中国南部で、又３万２千年から１万８千年前に欧州で、そして１万年前に中東でというように、スエーデンやアメリカの研究者によってその分析結果が異なっていますが、いずれにしろ犬は、ネコなどのペットや牛や馬などの家畜などの中でも最も古くから人と共に暮らしていることは間違いないようです。

＜感覚器＞

嗅覚：匂い物質によっては、人間の 1,000 倍から１億倍と言われています。また人間の 2 倍、約 800 種の匂いを嗅ぎ分ける能力もあります。⇒麻薬探知犬、警察犬など

聴覚：平均的な犬の聴覚能力は人間の 4 倍ほどあり、また人間には聞こえない高い音（65,000 ヘルツの超音波）まで聞き取れます。

視覚：犬の遠近順応能力は低く、およそ 60cm 以内にある物には焦点が合いません。また視力は人間に例えると 0.1～0.3 程度といわれていますが、夜間や暗闇での視力は高く、光や動くものに対しては素早く反応することができます。

色覚：人には赤・緑・青と色を感じる細胞が 3 種類ありますが、犬には赤と青の 2 種類しかありません。そのため「青色と黄色とその中間色」は識別できますが、「赤色と緑色」は黄色っぽい灰色の濃淡で見えています。

味覚：犬の味覚は、子犬の時期に発達します。しかし味を感じる味蕾の数は、人間の 1/5（2,000 個）程度と考えられ、食べ物のおいしさは、味よりも臭いや温度、感触で感じているようです。

＜睡眠と休息＞

○ 子犬は約 16 時間、成犬で活動的な犬ではおよそ 8 時間、一般的に室内犬は 12 時間程度の睡眠をとっています。

○ 犬は 1 日に短い眠りを繰り返し、大部分はすぐに目覚められる浅い眠りで、深い眠りは全体で 20%程です。

○ 犬にも安全で安心し、落ち着いて快適に休息や睡眠がとれるスペースが必要です。そのためにも犬専用のハウス（ケージ・クレート等）やベッドの利用をお勧めします。

＜マーキングと発情周期＞

○ 自分のテリトリー（縄張り）の主張や性別・年齢・体調などの情報を、他の犬に知らせる役目があります。

○ 一般にメスよりもオスの方がマーキングの頻度は多いですが、早期に去勢することは、その頻度を減らすことに効果があります。

○ オスはメスの発情時の生理臭によって１年中いつでも性的に活動できますが、メスは一般的に１年に２回発情します。

※メス犬によっては、年に１回または３回ということもあります。

＜犬の挨拶とコミュニケーション＞

○ 犬はお尻、耳、口の周りなどから出るフェロモンや体の匂いで、お互いに相手を確認します。（性別・年齢・生理など）※犬が来客や、初対面の人の匂いを嗅ぐのも、相手を確認するためです。

○ 犬は吠え声などの他にも、顔、表情、耳、尻尾、動き、など身体の様々なボディーランゲージやカーミングシグナルを使って、相手とコミュニケーションをしています。

※カーミングシグナル（犬語）とは、犬が相手からの脅威を避けるため、不安や恐怖などのストレスを感じた時に自分を落ちつかせるため、また相手に安心感を与えたり、友好的である事を知らせるためなど、他犬や人との対立を避けるために犬が使うボディーランゲージです。（例：顔や目をそらす、体の向きを変える、鼻をなめる、あくびをする、まばたきをする、尻尾をふる、地面の匂いを嗅ぐ、カーブを描いて歩く、ゆっくり歩く・動く、間に割って入るなど）

※カーミングシグナルは、人間が犬とコミュニケーションを取る時にも使えます。知らない犬、怖がりや攻撃的な犬、興奮している犬、不安やストレスを感じている犬に出会った時には、見ない、触らない、声をかけない、あなたがあくびをする、体の向きを変える、ゆっくり動く、などの対応をすれば相手の犬を安心させ、落ちつかせる効果があります。

４．犬の種類

世界の犬は、その形態や使用目的によっていくつかのグループに分けられており、その分け方は各国の愛犬団体によって異なっています。
日本のＪＫＣ（ジャパンケネルクラブ）やＦＣＩ（国際畜犬連盟）では、犬種を次の１０グループに分類しています。

１Ｇ　牧羊犬・牧畜犬：家畜の群れを誘導、保護する犬
ウェルシュ・コーギー、シェットランド・シープドッグ、ジャーマン・シェパード、ボーダー・コリーなど

２Ｇ　使役犬：番犬、警護、作業をする犬
グレート・デーン、グレート・ピレニーズ、セント・バーナード、ドーベルマン、土佐犬、ニューファンドランド、バーニーズ・マウンテン・ドッグ、ブルドッグ、ボクサー、マスティフ、シュナウザー、ピンシャー、ロットワイラーなど

３Ｇ　テリア：穴の中に住むキツネなど小型獣用の猟犬
ウエルシュ・テリア、エアデール・テリア、ウェスト・ハイランド・ホワイト・テリア、ケアーン・テリア、ジャック・ラッセル・テリア、ブル・テリア、ヨークシャー・テリア、ワイヤー・フォックス・テリアなど

４Ｇ　ダックスフンド：地面の穴に住むアナグマやウサギ用の猟犬
ダックスフンド（スムース・ミニチュア・ワイヤー・カニンヘン）など

５Ｇ　原始的な犬・スピッツ：日本犬を含む、スピッツ系の犬
日本スピッツ、秋田犬、甲斐犬、柴犬、アラスカン・マラミュート、サモエド、シベリアン・ハスキー、チャウ・チャウ、ポメラニアンなど

６Ｇ　臭覚ハウンド：大きな吠え声と優れた臭覚で獲物を追う獣猟犬
ダルメシアン、バセット・ハウンド、ビーグルなど

７Ｇ　ポインター・セター：獲物を探し出し、その位置を静かに示す猟犬
アイリッシュ・セター、イングリッシュ・ポインター、ワイマラナーなど

８Ｇ　７グループ以外の鳥猟犬
アメリカン・コッカー・スパニエル、ウェルシュ・スプリンガー・スパニエル、ゴールデン・レトリーバー、ラブラドール・レトリーバーなど

９Ｇ　愛玩犬：家庭犬、伴侶や愛玩目的の犬
キャバリア･キング・チャールズ・スパニエル、シー・ズー、チワワ、狆、パグ、パピヨン、ビション・フリーゼ、プードル、フレンチ・ブルドッグ、ボストン・テリア、マルチーズなど

１０Ｇ　視覚ハウンド：優れた視力と走力で獲物を追跡捕獲する犬
アフガン・ハウンド、グレーハウンド、サルーキ、ボルゾイなど

５．犬のライフステージ

① 幼犬期：生後１８週齢まで（人間ではおよそ１歳～６歳）
1. 新生児期：生後 3 週齢まで　2. 社会化期：生後 4 週齢～13 週齢
※この時期まではあまり恐怖心も無く、何にでも興味を持つ。
3. 社会化後期：生後 14 週齢～18 週齢
② 青年期：生後 18 週齢～２．３歳（人間ではおよそ６歳～２８歳）
③ 成犬期：3 歳以上（人間ではおよそ２８歳以上）
④ 老犬期：８歳以上（人間ではおよそ４８歳以上）

犬の年齢換算表

生後年月	小型犬	中型犬	大型犬	生後年月	小型犬	中型犬	大型犬
1 ヶ月目	1 歳	1 歳	－	8 年目	48 歳	53 歳	61 歳
2 ヶ月目	3 歳	3 歳	1 歳	9 年目	52 歳	58 歳	68 歳
3 ヶ月目	5 歳	5 歳	2 歳	10 年目	56 歳	63 歳	75 歳
6 ヶ月目	9 歳	9 歳	6 歳	11 年目	60 歳	68 歳	82 歳
9 ヵ月目	13 歳	12 歳	8 歳	12 年目	64 歳	73 歳	89 歳
1 年目	17 歳	16 歳	12 歳	13 年目	68 歳	78 歳	96 歳
1 年半目	20 歳	19 歳	16 歳	14 年目	72 歳	83 歳	103 歳
2 年目	24 歳	23 歳	19 歳	15 年目	76 歳	88 歳	110 歳
3 年目	28 歳	28 歳	26 歳	16 年目	80 歳	93 歳	117 歳
4 年目	32 歳	33 歳	33 歳	17 年目	84 歳	98 歳	124 歳
5 年目	36 歳	38 歳	40 歳	18 年目	88 歳	103 歳	131 歳
6 年目	40 歳	43 歳	47 歳	19 年目	92 歳	108 歳	138 歳
7 年目	44 歳	48 歳	54 歳	20 年目	96 歳	113 歳	145 歳

※上記換算表は、人と比較した場合の標準的な年齢ですので、犬の個体差や生活環境によっても多少の違いが生じます。また小型犬は成長が早く老化はゆっくりと、逆に大型犬は成長が遅く老化は早く訪れます。

６．子犬を迎える時

子犬は誕生後しばらくのあいだ親や兄弟と暮らすことで、犬社会の基本的なマナーを学びます。そのため、人の家庭に子犬を迎えるのは、生後６０日から８０日位までが一番理想的だと考えられています。※（愛護法では５６日以降）

子犬を家庭に迎える前には、犬の居場所（サークル）や休息スペース（ハウス、ケージ）、排泄場所、食器、グルーミング用品などの準備をして下さい。

※次ページ「犬を飼うために必要な道具」参照

また子犬は探究心が旺盛で何でも前足や口で噛んで確認します。子犬が誤って噛んだり食

べたりしないように、犬の目線で室内の物を片付けましょう。

初めて家庭に来た子犬は、親や兄弟と離れたことや環境の変化などで、不安や緊張などのストレスをかかえています。そのため子犬を迎えた当日は、出来るだけかまわずにそっとして、静かに休ませてあげましょう。その後も、トイレのしつけが出来るまでは犬を室内で自由にさせず、クレートやサークルなどで犬の居場所を制限して、排泄を済ませたあとに短時間クレートから出すようにして、徐々に行動範囲を広げてあげましょう。

7．犬の社会化

犬を飼ったら、飼主さんが最初に取り組んで欲しい事、それが「犬の社会化」です。

人は生まれて社会人となるまでに、家庭だけではなく幼稚園や学校などの教育システムや、近隣住民や地域社会との交流などによって社会性を養います。

では愛犬が人間社会の中で、ストレスがなく幸せに暮らすためにはどのように育てれば良いのでしょうか？

まず重要なのは、愛犬にも社会性を身につけさせることが大切です。飼主さんが親として、出来る限り楽しい経験をさせて、「人間の世界は怖くないよ、楽しいよ」と愛犬に自信をつけさせ、どんな状況でも落ち着いていられるようしてあげる事、それが「犬の社会化」です。

特に子犬の時期（3～4 ヶ月位まで）は、あまり恐怖心を持たず、好奇心が旺盛で、何でもスポンジのように吸収します。この時期に、飼い主が出来るだけ多くの人や犬、物などに楽しく積極的に触れ合わせて下さい。

このように刺激の多い環境の中で育て、十分に社会性を身につけた犬は、自信と順応性があるために、不必要に怖がったり、興奮したり、無駄に吠えたりなどの問題行動を起こす可能性が低くなります。

犬の心と体は最初の一年目で急速に成長します。人間に例えると小型犬ではおよそ 17～18歳になってしまいます。だからこそ飼主さんは犬が家族になったその日から、何よりも犬の社会化を優先させることが重要なのです。

犬の身体の病気はワクチンなどで予防できますが、犬の心の病気を予防するワクチンはありません。「社会化」は「犬の心のワクチン」なのです。

＜社会化期までに経験させること＞

犬は人間とは異なり、怪しいとか怖いとかを感じる判断基準が違います。人間にとってはなんでもないと思うものでも、犬が見たり触れたり経験したことがないものは、怪しくて危険なものだと感じてしまうこともあります。

そのためにも、幼犬期には楽しく安全に、出来るだけ下記のような経験をさせて下さい。

○ さまざまな人や物：幼児から老人まで各年代の男女、ひげやメガネ・ヘルメットや帽子・ツエや傘を持つ人・乳母車を押す人、配達員や特殊な服装の人など
○ 他の動物：他の犬、ネコ、ウサギ、鳥などのペット、牛・豚・馬などの家畜など
○ 家庭内の物：掃除機、ほうき、モップ、動くオモチャ、ドライヤー、シャワーなど
○ 乗り物：電車、バス、乗用車、オートバイ、自転車、車椅子、清掃車、工事車両など
○ 環境・場所：動物病院、公園、ドッグラン、商店街、スーパー、踏切、駅、海、山など
○ 音や光：チャイム、電話の着信音、サイレン、子供の声、風、雨、雷、花火、など

※すでにこれらの物を怖がる場合には決して無理をせず、まずはその対象物から距離を取り、犬が怖がらずに落ち着いている状態であれば、「誉め言葉」や「おやつ」を与えてみて下さい。その後も対象物に徐々に近づけながら、「何も怖くないよ、楽しいよ」とこれらの事柄と楽しい経験を関連づけるようにして教えて下さい。

それでも怖がったり吠えたりした時は、無理に近づけたり叱ったりせずに、黙って反対方向へ戻って、もう一度最初からやり直してみるなどして少しづつ慣らすようにしましょう。

＜社会化や馴化不足の弊害＞

○ 外出やお散歩などで犬の本能に刺激を与えずに、ほとんどの時間を室内で飼い主家族だけと暮らしていると、飼い主に執着しやすくなり、飼い主が外出して独りになると分離不安などから様々な問題行動を起こすようになることもあります。
○ 経験したことのない環境や音、見たことのない人や物などに対する不安や恐怖心から、他の人や動物、音などに吠えたり、攻撃したり、あるいはその状況から逃避するようになってしまいます。また不安や恐怖心からお散歩を嫌がるようになることもあります。そうなると、さらに社会化がむつかしくなってしまいます。

＜子犬の社会化とワクチン予防接種の関係＞

大切な社会化の時期（約４ヶ月まで）と、子犬のワクチンプログラムの接種時期は重なっ

てしまいます。そのため獣医師からは、「ワクチンプログラムが終了するまでは外に出さないで」と注意され、飼い主が病気の感染を恐れるあまり、子犬は室内で外部との接触を断たれた状況で、飼い主家族とだけの生活になっているケースが多く見られます。

しかし、幼犬期の社会化不足は、その後の犬の心の発達や行動に、大きな影響を与えてしまいます。

この問題を防ぐためにも、飼い主さんには自宅や外でも出来ることがたくさんあります。

例えば知人や近所の子どもを自宅に招く。子犬を抱いてご近所の人や宅配便、郵便配達人などに会わせたり、バス道路や商店街などへ連れていく。自宅や庭などで知り合いの安全な子犬同士で遊ばせたり、大人しく穏やかな成犬などに会わせるなど、子犬が怖がらなければその都度、子犬を褒めたり、触ってもらったりおやつを貰ったりすることで、愛犬の社会化を促進することが出来ます。

また現在の日本国内では、犬猫などの糞や尿のある不潔な場所や、予防接種をしてない野良犬などに接触しないかぎり、ウィルス感染の危険性はほとんどありませんので、飼い主さんは極端に神経質になる必要はないと思います。(※これは筆者の見解ですので、あとは飼い主さんの自己判断と責任のもとで実施してください)

現実には子犬がウィルス感染で死亡する確率より、社会化不足による問題行動が原因で飼主が悩んだり、手放してしまうケースの方が圧倒的に多いのです。

8．最初に教えること・しつけのヒント

○　子犬の時から顔やお腹、口や耳、手足やしっぽなど、身体全体を触られたりブラッシングをされることに慣らさせておくと、身体の異常なども早期に発見できます。また美容院でのトリミングや動物病院などでの診察も嫌がらなくなるので安心です。
まずは子犬を優しく抱いて、最初はおやつなどの臭いを嗅がせながら、敏感な手や足、耳や口の中などを触ります。犬がおやつに夢中になって、嫌がらずにおとなしく触らせていたら、誉めておやつをあげて下さい。この方法を何度か繰り返していると、犬はおやつが無くても、飼い主に触られる事を喜ぶようになり、慣れてくれば歯磨きや爪切りなども出来るようになります。

○　名前を呼んだら飼い主の方を見る。オイデや呼び戻しで飼い主のそばに来る。身体を自由にさわらせる。指に歯を当てずにおやつを優しく食べる。食事中に食器に手をいれても平気でいる。大人しく首輪をつかませる。飼い主の指示でくわえたものを放す。飼い主の指示で、サークルやクレート（ハウス）に入っておとなしくする。上手にペットシーツに排泄ができたときなど、飼い主の望む正しい行動が出来たときには、必ず毎回褒めて、最初のうちはご褒美もあげるようにして下さい。
逆に、出来なかった時や間違った時には、決して怒らないことが大切です。まだルールが分かってない犬を怒ってしまうと、犬は怒られた理由が分からず混乱して、飼い主への信頼を失ってしまいます。

○　群れで暮らす犬にとって、独りぼっちは苦手です。日常の生活の中で、犬が寝るときや

飼い主さんが犬を監視できない時には、サークルやクレート（ハウス）などで、独りで過ごすことに慣れさせておくと、排泄の失敗や事故の予防にもなり飼い主も安心です。
その為には、飼い主が時々見えなくなっても必ず戻ってくるのだと、犬に理解させ安心させることです。
最初は短時間、犬を独りにすることから始め、徐々に時間を長くしていきます。この時、犬が鳴いたら、鳴き止むのを待ってから戻るようにして下さい。また飼い主の外出時や帰宅時には、大げさに犬に声をかけないようにしましょう。声をかければ、犬は飼い主がいなくなることを予測して不安になってしまいます。また飼主も帰宅時には着替えなど自分の用事を済ませ、飼い主も犬も落ち着いた状態で、サークルなどから出してあげるようにして下さい。

○　犬に「オスワリ」「フセ」「マテ」などしつけの基本動作を教える時は、楽しくゲーム感覚で、短時間（2～3 分以内）の練習を日に数回にわけて行いましょう。犬ができるまで長時間繰り返し行えば、犬の集中力も無くなり、しつけの練習そのものを嫌いになってしまいます。
また練習の時に、最初から犬に完璧な動作を求めないようにして下さい。まずは希望の動作や同じ姿勢を一定時間保つことなども、最初はそれに近い動作が短時間、少しでも出来れば、そのつど誉めてご褒美を与えてください。その後も決して無理をさせず、成功体験を重ねながら徐々に基準を上げて行くようにしましょう。そして毎回、練習の最後は少しでもできたことを褒めて、犬が喜んで終了するようにして下さい。

○　犬のしつけには一貫性が大切です。犬が同じ行動をしていても、そのつど飼い主家族の対応が違えば、犬は混乱して不安になり、飼い主を信頼できなくなってしまいます。

＜クレートトレーニング＞

犬は、壁に囲まれ暗くて落ち着ける場所を好む習性があります。愛犬にもその習性を利用してクレート（ハウス）は楽しく、安全で安心して休息できる場所だということを教えて下さい。クレートトレーニングのコツは犬を無理に入れようとせず、犬が自分の意思で自ら入るようにすることです。

まずはクレートに居心地の良いクッションなどを敷き、最初はドアを開けたままで、中にドッグフードやおやつなどを入れておき、愛犬がクレートに入ったら「ハウス」と言いながら優しく誉め、追加のおやつを入れて下さい。また出てきた時には犬を無視して相手をせず、再度クレートに入るのを待ちます。これを繰り返して犬にクレートは楽しい場所だと教えます。

そして犬がクレートに慣れてきたら、ドッグフードなどを詰めた噛むオモチャ（例：コング）など食べるのに時間がかかる物を入れ、ドアを閉めてハウスにいる時間を少しずつ長くします。またハウスに慣れても、犬が出たくて吠えたときは無視し、諦めて静かになるのを待って、ハウスから出すようにして下さい。

このトレーニングは恐怖心の少ない２～３か月の子犬の場合だと比較的簡単ですが、

過去に閉じ込められたりした経験から、ハウスを嫌な場所だと学習している場合には、オモチャやおやつをハウスに入れておいたり、朝夕の食事をハウス内でさせるなどして、ハウスが自分にとって楽しく安全で落ち着ける場所だと、根気よく教えてください。

クレートトレーニングが出来ていると、犬も落ち着いて休息が出来、お留守番や車での移動の時、ペットホテルや入院で犬を預ける時、災害時の避難時など、生活のいろんなシーンで人も犬も安心・安全に過ごせます。

※同じようにすれば、犬用ベッドやマットなどでも、その場所で休息することを教えることが出来ます。

＜トイレトレーニング＞　※次ページイラスト参照

子犬の時期は膀胱が未成熟のため、一日に十数回排泄をしますので、子犬の時がトイレを教える一番のチャンスです。そのためには子犬が正しい排泄場所を覚えるまでは、犬を室内で自由にさせず、子犬の居場所（サークル・クレートなど）を一時的に制限することが大切です。そうすればリビングなど他の場所での排泄の失敗を防ぐことが出来ます。

そもそも犬には人間のように決められた場所で排泄をするという習慣はありません。また犬は自分の寝床を清潔に保ち、濡れたり汚れたりするのを嫌いますので、寝床から少し離れた場所で排泄を行うという習性があります。さらに、犬は足裏の感触で吸湿性のある柔らかな場所を排泄場所だと判断します。

トイレトレーニングでは、こうした犬の本能や習性を理解して根気よく教えてやれば、犬は決められた場所で正しく排泄できるようになります。

まずは子犬に排泄の失敗をさせないためにも、あなたが子犬を監視できない時は、サークルやハウス（クレート）などを使って子犬の居場所を一定時間制限して下さい。

子犬が排泄をするタイミングは、寝て起きた時、リラックス後動き始めた時、食事や水を飲んだ後、遊び始めたり興奮した時などです。飼い主さんは子犬が排泄するこれらのタイミングを上手に予測して、サークルなどで囲んだトイレマットに連れて行き、優しく掛け声（トイレやワン・ツーなど）をかけながら、トイレで正しく排泄が出来たらすぐに誉めておやつなどのご褒美を与えて下さい。またトイレが済んだ後はしばらく遊んでやったり、お散歩に連れていくことも犬にとってのご褒美になります。

もしも 3～5 分ほど待ってもすぐに排泄をしない時はもう一度ハウスに入れ、30 分ほど排泄を我慢させたあとでハウスから出し、再度トイレへ連れていってください。

また、子犬は平均的に２ヶ月で２時間、３ヶ月で３時間、４ヶ月で４時間、５ヶ月を過ぎれば７～８時間位は排泄を我慢することが出来るようになります。

なお、トレーニングの途中で、犬がトイレ以外の場所で排泄しても決して叱ってはいけません。まだ完全に排泄場所を理解していない犬にとっては、叱られた理由がわかりません。

そのため犬は、排泄をした事とその時そばにいて叱った飼い主の存在を関連づけ、飼い主が見ているところでは排泄を我慢して、飼い主が見ていないところで排泄をするようになるため、さらにトイレのしつけが難しくなってしまいます。

ですから飼い主さんは、もし犬が排泄を失敗しても決して叱らずに、犬を興奮させない様に落ち着いてサークルなどに入れ、匂いが残らないように清掃して下さい。

＜愛犬と楽しくコミュニケーション＞

動物の中で一番古くから人と暮らしている犬は、人間の表情や目の動き、声のトーン、しぐさなどから、飼い主の喜びや怒り、悲しみ、興奮や穏やかなどの感情（エネルギー）を読む能力が他のどんな動物よりも優れていると言われています。

それは犬が人のそばで一緒に生きていくために、これらの能力を獲得し進化させてきたからです。

ですから、犬にストレスを与えずにコミュニケーションを取るためには、飼い主が犬を褒める時は笑顔と落ち着いた優しい声で、叱る時は怖い顔と強い声で、また指示を出すときは穏やかな表情と声で、という風に表情や声を上手に使い分けて下さい。

また犬に何かを教えたり遊びやゲームの時には、楽しそうな笑顔と明るく元気な声で相手をしてやれば、犬もやる気が生まれ、楽しく学んだり遊ぶことが出来るようになります。

例えば人の場合、座るという行為は座敷や椅子などその場所の状況によって座り方を判断しますが、犬は人間のように言葉の意味やその本質を理解して行動しているのではなく、その時の環境や状況、飼い主の言葉やしぐさと自分の動作や行動を関連付けて学習しています

ですから犬への指示語や手の動作などは、犬が混乱しないように家族内で統一しておきましょう。例えば犬を座らせる合図を「おすわり」「すわって」「シット」などと各家族が違った言葉や動作で指示をすれば、犬は混乱してしまいます。

また、犬は多くの言葉や合図を覚える事ができますので、日頃から家族みんなが同じ言葉

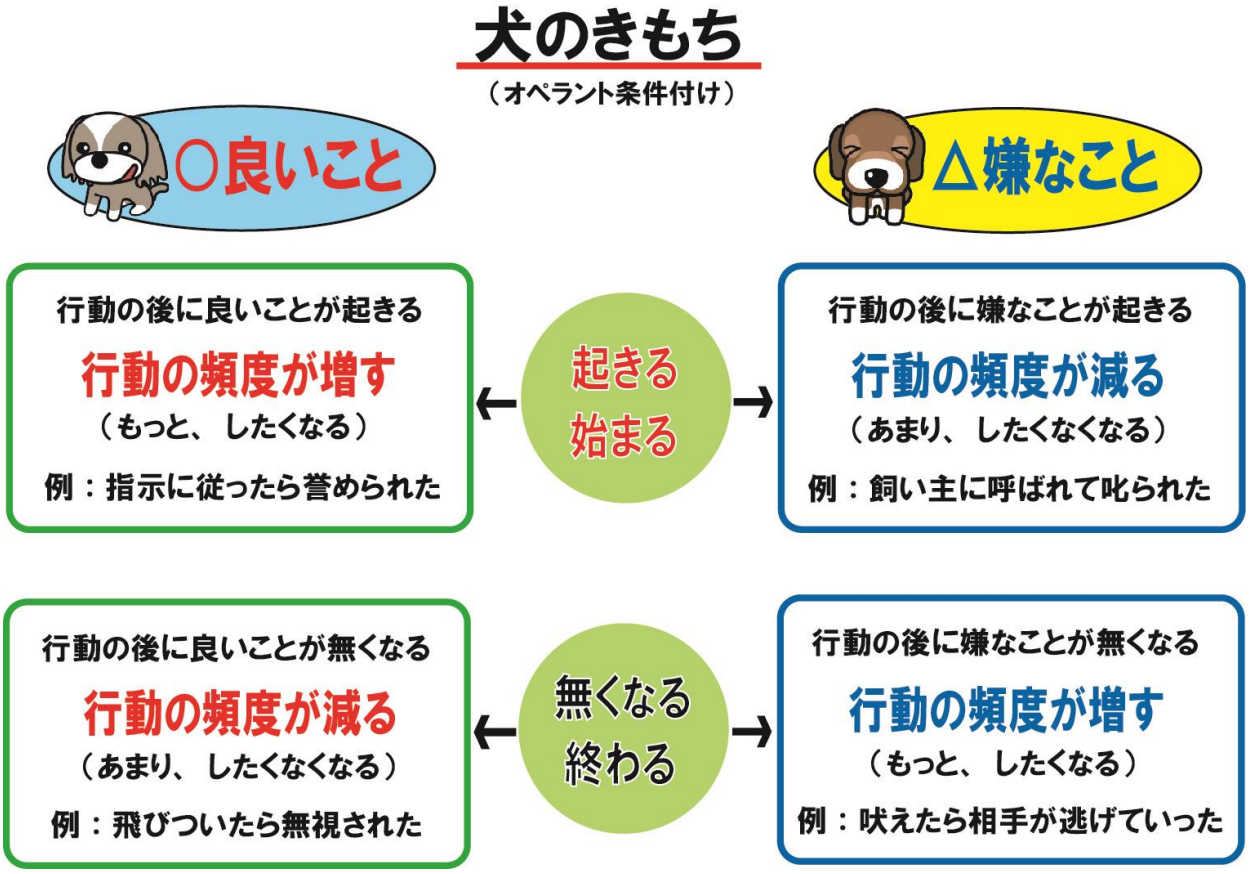
や合図で犬に話しかけ、コミュニケーションをとるようにすれば、犬も数多くの言葉や合図を理解できるようになり、愛犬との生活がさらに充実し楽しくなります。

9．犬の気持ち

＜オペラント条件付けとは＞

動物の行動は、その結果によって左右されます。例えば、犬が何かの行動をした結果、自分に良いことが起きたり、嫌なことが無くなれば、その行動は強化され頻度が増えます。また行動の後に良いことが無くなったり、嫌なことが起きれば、その行動の頻度が減ります。

※これらの結果はすべて、行動の直後に起きなければあまり効果はありません。



○ 人は自分が他人からどのように見られているかを気にしますが、犬は人や他犬が自分に何をするのかを気にしています。

○ 犬は未来を想像したり、過去を振り返って考えたり、何が起こったのかをじっくり検討してその意味を理解する能力はありません。そのため犬は、短い間隔で起こった二つの出来事やその時の周囲の状況などを関連づけて、因果関係の結論を導きだそうとします。

○ 人と犬では善悪の判断基準が違います。犬は自分にとってそれが安全か危険か、楽しいことか、嫌なことかを判断して行動しています。

○ 犬には犬の本能に基づいた常識やルールがあります。人間社会の常識やルールは、飼い主が根気よく教えるしか方法はありません。

○ 犬にとって身近にある物はすべて噛むオモチャです。犬にはそれが噛んで良い物かいけない物か、又高級品か安物か、古い物か新しい物かはわかりません。

○ ほとんどの飼い主は、犬が困った行動をするたびに叱りますが、ルールを理解してない犬には何がいけないのかが理解できず混乱し、不安になり、飼い主に対しても恐怖心を持つようになってしまいます。叱るだけでは犬に何も教えることはできません。

○ 人間の家族という群れの一員になった犬は、強く、優しく、信頼、尊敬できる穏やかなリーダー（親）を求めています。そのためには、飼い主は穏やかさと共に毅然とした態度と一貫性のある対応で、愛犬に対して主導権を持って家庭内や社会生活でのルールと制限を教えることが大切です。

１０．家庭犬のしつけ

犬は犬として生きるために必要な身体と能力を持って生まれてきます。

しかし人間は、人とは体型や知性、能力、習慣の異なる犬に対して、人間の文化や習慣、道徳観を一方的に押し付けようとした結果、両者の間には多くのトラブルが起きています。

でもこのようなトラブルも、飼い主さんが人とは違う犬の文化や気持ちを理解して、人間社会のルールを教えてあげることで、未然に防ぐことが出来るのです。

数学などと違い、犬のしつけ方に関しての手法や答は一つだけではありません。また犬種の特性や性別、性格、飼い主の家庭環境などによっても異なります。

しかしどんな場合でも家庭犬のしつけでは、最新の動物学習理論や行動学で科学的に実証されているように、愛犬に痛みや恐怖心を与えずに、ストレスの少ないしつけ方をすれば、大きな失敗を防ぐことが出来ます。

○ ドミナンス理論：権勢症候群やアルファシンドローム（犬が飼い主を支配するようになる）などの考え方の基となる理論で、それを防ぐために飼い主が力で犬を支配し、服従させるしつけ方。

最近まで、多くの犬のしつけにはこの理論が使われてきましたが、最新の犬の学習理論や行動学の研究によって、この方法では「飼い主と犬との間に対立関係を生むことになる」として、現在では犬のしつけ方は「服従ではなく共生のため」に行う、という方法が主流になっています。

○ 犬にとって、最高の喜びの一つは、飼い主と強いきずなで結ばれることです。人を犬嫌いにさせるのは、犬ではありません。適切なしつけをせずに他人に迷惑を掛けてしまう飼い主の責任なのです。

○ 犬にとって、一番大切なのは子犬の時期（４ヶ月頃まで）です。まずは社会化のために多くの経験をさせる事を最優先して下さい。オスワリ、フセ、マテ、ツイテなどの服従訓練や家庭犬としてのしつけは、後からいくらでも教える事が出来ます。

また人間の場合、ヨチヨチ歩きの赤ん坊がいれば、危険がないように室内を片付けたり、一人で自由にさせないのと同じように、子犬も飼い主が監視できない時には、サークルやハウス（ケージ・クレート）などに入れ、居場所を制限するようにして下さい。

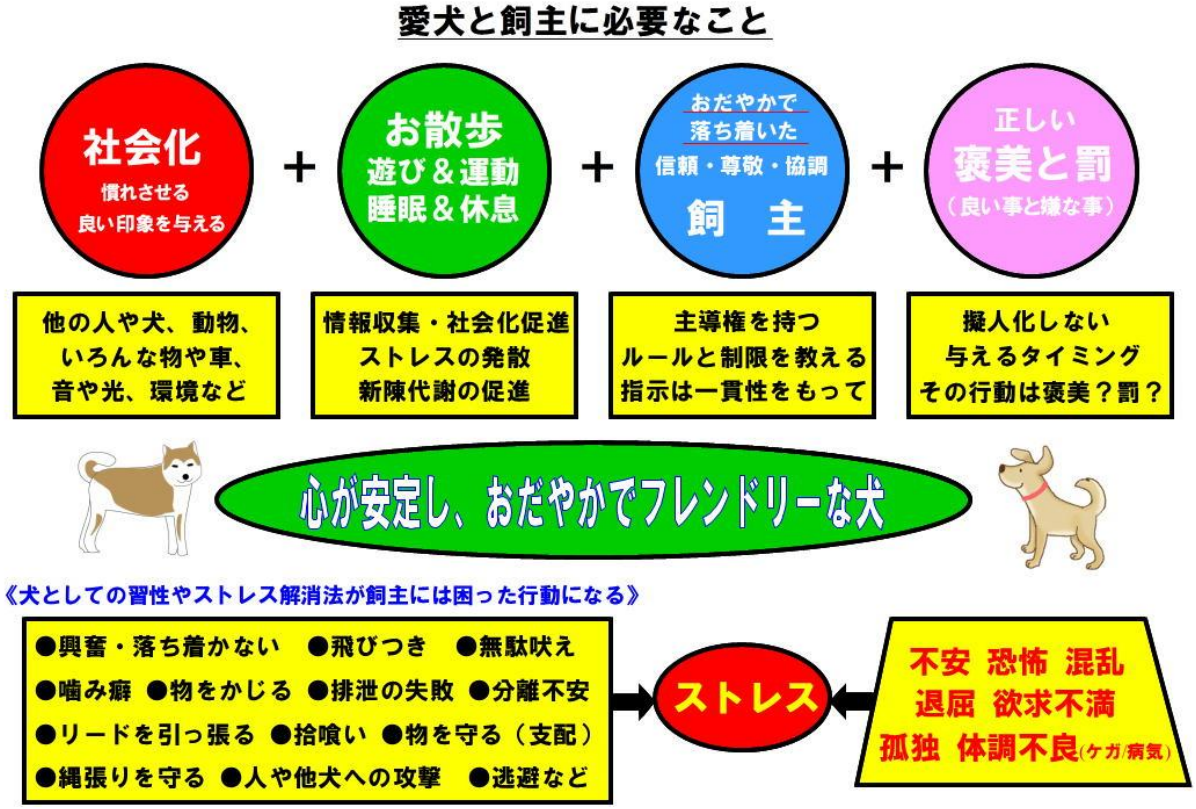
そうしておくと、何も家庭のルールを知らない子犬が、飼い主の見ていない時にイタズラや排泄の失敗をして、後で飼い主に叱られても子犬にはその理由が分からずに、混乱したり不安になるということも防げます。

＜愛犬と飼主に必要なこと＞

人間も仕事や家庭、健康や将来に対する不安や悩みなどのストレスがあれば、心が安定して穏やかにはなれません。

犬も同じです。社会化不足による不安や恐怖心、飼い主の一貫性のなさや間違った対応による混乱、お散歩や運動不足などによる退屈や欲求不満、孤独による寂しさ、病気やケガによる体調不良などがあれば、犬はそれらの不安やストレスを発散するために、犬の本能に基づいた犬流の流儀で興奮したり、吠えたり、イタズラなどをするようになります。

犬でも不安やストレスが少なければ「心が安定して穏やか」になれるのです。そのために愛犬と飼主さんに必要なこと。それが「社会化」、「散歩と運動、休息」、「信頼・尊敬できる飼い主」、「正しいご褒美と罰」の４つです。



① 社会化　　※7 ページ、7. 犬の社会化の項参照

② お散歩・遊び＆運動・睡眠＆休息

人には仕事や家事の他、テレビや読書、スポーツやショッピングなど、他にもたくさんの仕事や楽しみ方がありますが、猟犬や牧羊犬などと違って、今の家庭犬には仕事や楽しみはわずかしかありません。

では家庭犬にとっての仕事や楽しみとは何でしょう？　食事やおやつ、大好きな飼い主のそばにいる事、ボール遊びや他犬との遊び、そしてお散歩です。

犬にとってのお散歩は、運動ということだけではなく、人がテレビや新聞などから日々新たな情報や知識を得るように、犬も自分の家や庭などの縄張り以外の場所を見たり、嗅いだりすることによって新たな情報や知識が得られ、五感とともに本能が刺激され、脳が活性化

されます。これは楽しみの少ない犬にとってはとても良い刺激となり、気分転換と共にストレスの発散になります。

またお散歩をすれば、他人や他犬などとの出会い、異なる環境などを経験することで社会化も促進されます。さらに暑さ寒さで季節の変化を感じ、太陽光を浴びることで骨が丈夫になり、皮膚、被毛、血行など新陳代謝も活発になります。

その他にも、毎日のお散歩中に「オスワリ、マテ、ツイテ」などのしつけをすることで、飼い主と愛犬の絆がさらに深まり、犬だけではなく飼主さんの心と体も健康になれます。

またお散歩以外にも、ボール投げをしたり、かくれんぼやおやつを探すゲームなど、身体と頭を使って本能を刺激する運動をさせることも、犬のストレス解消にはとても有効です。

そして、お散歩や遊び、運動、食事のあとは、十分に休息させることも大切です。

③ 信頼・尊敬できる飼い主

皆さんが自分の愛犬を子供と同じように家族の一員だと思うのであれば、飼い主さんが親として「世の中にタダのものは無い」、つまり「飼い主の望む行動をしなければ、何も良いことは得られないヨ！」と、愛犬に対しても親としての主導権を持つ事です。簡単に言えば、「わがままは認めませんよ！」という態度で愛犬と接する事です。

でも飼主さんや家族の対応が、時と場合によってそれぞれ違っていれば、犬には何が正しいのかが分からずに混乱してしまいます。そうならない為にも、飼主さん全員が一貫性のある指示や対応をすることがとても大切なのです。

その事を理解した上で、愛犬に家庭内や社会でのルールと制限を教えて下さい。もし飼い主さんが犬を自由にさせ何も教えてあげなければ、犬は犬の本能や習性に基づき、自分にとって都合の良い、犬流のルールで行動するようになってしまいます。

また人でも同じですが、犬から見てもすぐに興奮したり吠える犬は嫌いです。ですから飼い主さんも犬から信頼・尊敬されるためには、興奮したり大きな声で怒るのを止めて、出来るだけ「穏やかで落ち着いた態度」で、犬と接する事がとても重要です。

④ 褒美と罰

犬にとってのご褒美とは、おやつや食事だけではありません。飼い主さんに褒められたり優しくなでられる事、お散歩をする事、飼主さんや好きな他犬との遊び、抱っこが好きな犬にとっては抱っこされる事、ストレス発散のための破壊行為、要求を叶えるために吠える、縄張りを守って吠える事など、飼主から見れば良い行動でも悪い行動でも、大好きな飼主が自分に注目してくれることすべてが犬にとってはご褒美になります。

このように、犬にとってのご褒美とは、自分にとって都合の良いことや楽しいことが起きること、つまり自分の望み（要求）が叶うことです。

ですから飼主さんは普段の生活の中で、愛犬へのご褒美をおやつなどの食べ物だけに頼るのではなく、時には愛犬が喜ぶ他のご褒美も上手に使い分けることが大切です。

逆に犬にとっての罰とは、自分の望み（要求）が叶わなくて飼主さんに無視されたり、叱られるなど、良い事や楽しい事が無くなって、自分に嫌な事が起きることです。

このことを理解した上で、飼主さんは日ごろの愛犬の行動に対して、どんな時に褒美を与

え、どんな時に罰を与えるのかを良く考えて愛犬と接するようにして欲しいのです。

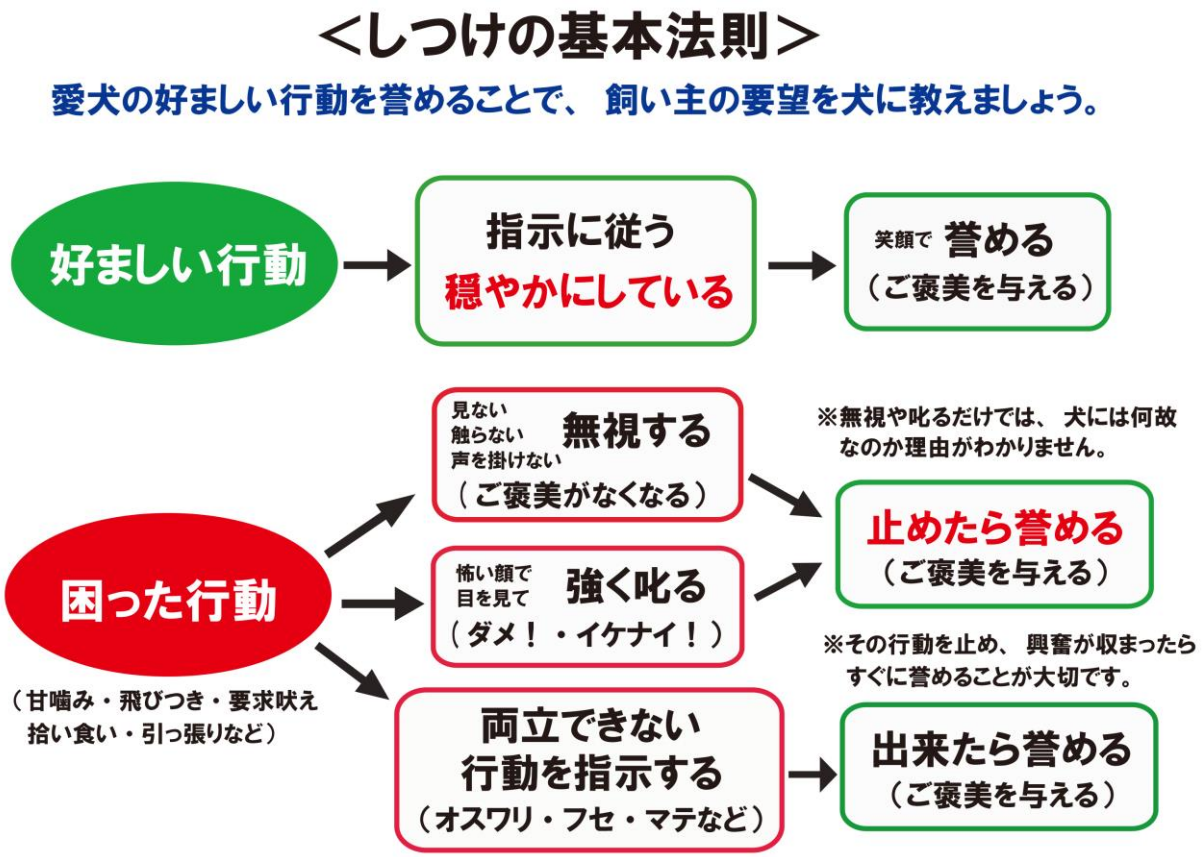
つまり、愛犬の好ましい行動に注目してご褒美を与え、その行動を強化する。逆に、困った行動は無視をするか、無視できない時は怖い表情で犬の眼を見て叱り、その行動を止めたらすぐに褒めることで、愛犬に何が正しい行動なのかを教えてあげることが大切なのです。

＜叱る前に何が正しいことなのかを教える＞

人間でも生活の中で身についた、悪いくせや習慣を変えるのは大変です。同じように犬も、人と生活する上で問題となる行動が習慣になってしまわないように、子犬の時期に家庭や社会での正しいルールを教えてあげましょう。

犬が噛んだり、吠えたり、どこにでも排泄することは、犬の社会では当たり前で正常な行動です。しかし人との生活では、犬が噛む対象や吠えるタイミング、排泄する場所などが人にとって都合が悪いだけです。ですから、人との生活のルールを何も教えられていない犬がそれらの行動をしたからといって怒っても、犬には怒られた理由が分からないのです。

そのためには、犬を出来るだけ叱らずに済むように、犬の目線で家庭環境を整えましょう。その上で、人から見て困った行動は無視をする、または叱って、その行動を止めたらすぐに誉める事。但し、犬がまだ興奮状態の時には、犬を少し落ち着つかせてから優しく誉めるようにして下さい。また普段から、犬が好ましい行動をしている時にこそ注目して、興奮させない程度に優しく誉めるようにして下さい。そうすれば犬は飼い主にとって好ましい行動をすれば、注目され誉められるということを学習し、家庭や社会での正しい態度とルールを理解するようになります。



＜上手な褒美と罰の与え方＞

褒め方：　飼主さんは犬に「オスワリ」などの動作を教える時には、犬がその指示に従った時に、褒めたりオヤツをあげたりして「オスワリ」の言葉と動作を教えていると思います。

それと同じように、皆さんが「心の安定した穏やかでフレンドリーな犬」を望むのであれば、飼い主さんの指示に従った時だけではなく、「おだやかに落ち着いている時」、また「良い行動をしている時」など、「愛犬が飼主にとって好ましい行動をしている時」にも注目して、優しく褒めるようにして欲しいのです。

どんな犬でも一日中吠えたり、家具などを噛んだり、散歩中ずっとリードを引っ張っている犬はいません。そんな犬でも吠えず、噛まず、リードを引っ張らない時間があるはずです。その時の犬の態度や行動に注目して、褒めるように心がけて下さい。そうすれば犬は褒めれば褒められるほど、飼い主の望む行動をするようになってきます。

また子犬の時や興奮しやすい犬の場合は出来るだけ相手をせず無視して、犬を落ち着かせてから、優しく褒めるようにして下さい。

人も犬も同じです。いくつになっても褒められる事は嬉しいことです。だから犬が何歳になっても、良い行動は毎日たくさん褒めてあげることを忘れないで下さい。

叱り方：　犬を叱る前に、まずは無視をする事が基本原則です。それが出来ない時は、犬のそばに行き眼を見てハッキリと強い口調で「ダメ！」とか「静かに！」と叱り、犬が驚いてその行動をやめたらすぐに褒めましょう。但し、犬がまだ興奮している時は相手をせず、犬が落ち着くのを待ってから優しく褒めるようにして下さい。

この時に大切なのは、決して飼主さんが感情的になって、犬を怒って手で叩いたり、口をつかんだりしなで下さい。

さらに褒めたり叱ったりする時の、飼い主の表情や声のトーンも重要です。＜P12.犬と楽しくコミュニケーション＞の項で解説しているように、犬は人の表情や声、態度から相手の感情をすぐに読み取ります。

特に男性に良く見受けられるのは、褒める時も叱る時と同じように、表情や声のトーンがあまり変わらない飼主さんを見かけます。相手は犬です。恥ずかしがらずに、褒める時は満面の笑みと優しい声で、叱る時は真剣な表情と少し低い怖い声で、という風に表情や声を上手に使い分けるようにして下さい。

ただし、犬と遊ぶ時や何かを教える時は、明るい笑顔と元気な声で相手をしてやる方が、犬も楽しく遊んだり、学ぶことが出来ます。

いつもこのような犬との接し方を心がけていれば、飼主さんの気持ちが愛犬にも良く伝わるようになります。

○ **正しい行動をいつも褒められている犬は、自分にとって良いことが起きるためには何をすれば良いのかを、自ら考えて行動するようになります。**

○ **正しい行動を教えられてなくて、何かをするたびにいつも怒られたり、叩かれたりしている犬は飼い主への信頼を無くし、混乱や不安や恐怖心から問題行動がさらに激しくなったり、逆に何をしても叱られるので、自ら何も考えて行動しない無気力な犬になってしまう**

可能性もあります。

＜罰を与えることの問題点＞

○犬の問題行動（吠える・咬む、穴掘りなど）と言われるものは、人間にとっては困った行動ですが、犬にとってはそのこと自体が楽しく、ストレス解消やごほうびとなっているため、その行動が強化され頻度が増します。

○罰には犬の困った行動を一時的に止めさせる事はできても、犬がこれまでに強化されてきた楽しい行動を無くす力はありません。一つの行動を止めさせても、犬はすぐに代わりの問題行動を見つけてしまいます。例えば、テーブルの脚を咬む⇒罰を与える⇒テーブルの脚は咬まなくなる⇒他のイスや家具を咬むなど。

○犬は罰を自分の行動と結びつけるのではなく、罰と飼い主の存在（周囲の状況）を結びつけてしまいます。またいつも罰を与えていると、飼い主への信頼を無くし、無気力になったり、不安から攻撃的になってしまう事もあります。

（例）犬が唸る⇒罰を与える⇒唸るのを止める⇒唸らずにいきなり咬むなど。

＜罰を与えるための条件＞

罰を与えるには、犬がその行動をした①「その瞬間に」②「適度な強さ」で③「毎回必ず与える」という一貫性が必要です。

① 罰は、その問題行動の最中または直後（１～２秒）でなければ効果がありません。例えば犬が困った行動を止めて、あなたの傍に来た時に罰を与えると、あなたの傍に来た事を叱られたと感じてしまい、呼んでも来なくなる可能性があります。

② 罰は、犬が叱られたと感じる程度に強くなくてはいけません。
例えば叱り方が中途半端だと、犬は飼い主の注目を得られたとか、遊んでもらっていると勘違いしてしまいます。また叱り方を徐々に強くしていくと、それに慣れてしまいます。またあまりに激しく強すぎると犬は恐怖を感じ、飼い主との信頼関係を壊す可能性もあります。

③ 飼主は犬を２４時間監視することはできません、そのために犬はストレスを感じれば、飼い主の見ていない時に、排泄や盗み食い、家具をかじるなどの問題行動を起こしてしまいます。そのために一度でもその行為を見逃し、犬がそれらの成功体験を味わってしまうと、飼い主が気付いたときだけに罰を与えてもあまり効果がないという難しさがあります。
例えばルールを知っている人間でさえ、パトカーや警察が居なければスピード違反や駐車違反を繰り返します。まして自分の行動を悪い事と思っていない犬を叱っても、ほとんど効果は期待できません。

※ 人間の子供であれば、叱った後になぜ叱られたのか、どうすれば良いのかを言葉で説明し理解させる事が出来ますが、言葉を理解出来ない犬には、出来るだけ犬を叱らなくて済むように環境を整え、犬の好ましい行動に注目し、その行動にご褒美を与えて、犬に何が正しい行動なのかを根気よく教えることが大切なのです。

※ 犬に罰（叱る）を与えても効果があるのは、犬が正しい行動を習得し、正しく理解

しているのに、間違った行動をした場合のみです。

○　天罰方式（物や音で犬を驚かす）の問題点

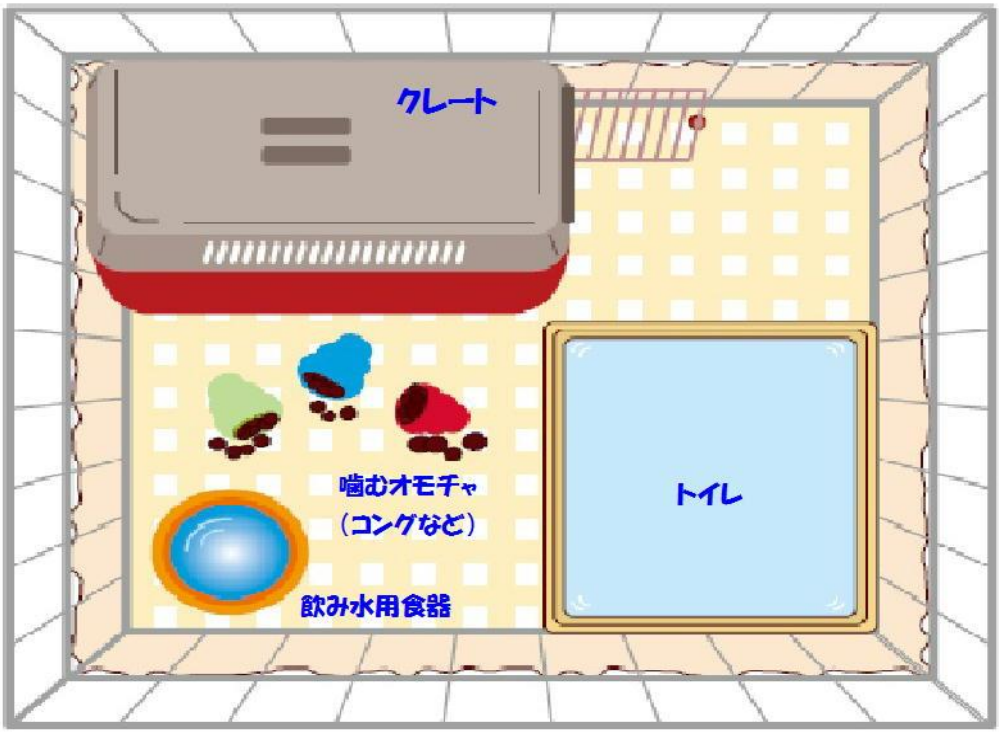
犬に飼い主が行ったと感じさせずに、空き缶などで大きな音を出したり、水鉄砲をかけたりなど、犬にとって嫌なことが起きれば、犬は一時的に驚いてその行動を止めるという即効性はありますが、毎回行えないことや、犬によっては、その事に徐々に慣れてしまうケースもあります。

また臆病で神経質な犬の場合、その物や音に対して、恐怖心を持つようになってしまう危険性もあります。

＜罰を与えずに済む環境整備＞

○出来るだけ犬に罰を与えないようにする為には、飼い主が犬を監視出来ない時は、サークルやハウス（ケージ・クレート）に入れるようにして下さい。また犬を自由にさせる場合は、犬の届く場所に食べ物などを置かない、ごみ箱にフタをする、噛むオモチャで遊ばせるなど、犬を叱らずに済む環境を整え、その上で、飼い主にとって好ましい良い行動を誉めて、その行動を強化し、困った行動は出来るだけ無視をして、飼い主からの注目を得られなくするのが、犬にとって一番学習しやすい方法です。

＜お留守番用サークル＞



＜お留守番＞

日中など長時間留守にする場合は、上記イラストのように、大きめのサークル内にクレ

ート、トイレマット、水、おやつを入れたコングなどの噛むオモチャを入れてお留守番をさせれば、犬も退屈せず、排泄の失敗もなく、またクレートで落ち着いて休めるので、安心です。（この場合、犬が自由に出入りできるよう、クレートのドアは開けたままにしておいて下さい）

＜母性愛の弊害＞

優しさや慈しみなどの母性愛は、女性が生得的に持っているすばらしい本能です。しかし、その優しさも一歩間違えると、犬にとってはわがままを助長することになってしまいます。

犬が吠えるから、寂しそうだから、おやつを欲しがるから、ケージに入れるのはかわいそうだから‥、などと、犬の要求通りに接することは、犬から見れば飼い主は自分の思い通りなるわけで、家庭犬としてのルールや制限が無くなってしまいます。

その結果、わがままで乱暴な支配的な犬になり、誰からも愛されず最後には飼い主にも見捨てられてしまいます。つまり悲しむのは飼い主ではなく、あなたの愛犬なのです。

子犬の時には可愛いからと許しておいて、成犬になってからそれらの困った行動を改めようとすれば、犬は混乱してしまいます。飼い主が大切な家族の一員として愛犬を育てるならば、子犬の時期からしっかりと家庭のルールと制限を教えるべきだと思います。

そして、ルールを守り飼い主の指示に従って良い行動をしている時にこそ、あなたの母性愛を発揮して、愛犬に心からの愛情を示してあげて下さい。

１１．しつけ方の具体例

犬の性格や気性、年齢などによってしつけ方もいろいろありますが、ここではほとんどの犬が起こす問題行動に絞って、その基本的なしつけ方の一例をご紹介します。

＜噛み癖＞

犬が物を噛むのは犬としての習性で正常な行動です。犬は噛むことで物の確認をしたりストレスの発散をしています。ですから噛む行為そのものを禁止してはいけません。

犬には噛んでも良いものと悪いものの区別を教えてあげて下さい。例えば、犬には古いスリッパや新しい高級なスリッパの違いは判りません。家具や犬のオモチャも犬にとっては同じ噛む為のオモチャです。

普段から、飼い主の目が届かない時に子犬を室内で自由にさせていて、下着や大切な家具や絨毯、置物などを噛まれてしまえば大損害です。子犬が家具やスリッパ、靴、靴下などを噛んで遊ぶことが習慣になる前に、犬が噛んでも良い安全なオモチャを与え、それで犬が遊んでいる時にはちゃんと誉めてあげましょう。

その上で、他の物を噛んだ時はその場で犬の眼を見て、「ダメ！」や「イケナイ！」と叱って、止めたらすぐに褒めることで正しい行動を教えて下さい。

また、コングなどの噛むオモチャで楽しく遊ぶ習慣ができれば、ハウスでのお留守番も寂しがらずに出来るようになります。

＜咬みつきの抑制＞

咬む力の弱い子犬の時期には、１日の食事量の範囲内でドッグフードやおやつを手から与えるようにして、犬が少しでも指を咬んだら、大げさに「痛い！」とか「ダメ！」と叫んでおやつを与えないで下さい。そして「優しくネ！」と言いながら、指に歯をあてずに口先で優しくおやつを食べるようになったら、その時はしっかり誉めて下さい。

また、それでもしつこく強く噛む場合には、「痛い！」「ダメ！」と叫んで犬を部屋に残して出て行き、犬が落ち着くのを待って、15～30 秒後に黙って犬のところに戻って下さい。それを繰り返していると、犬は興奮したり人の手を咬めば、大好きな飼い主が居なくなり、おやつも貰えず遊びの相手もしてもらえないことを学習します。

＜飛びつき＞

犬は子犬の時期に母犬の口から吐き戻した食物を貰うため、母犬の口を舐める習性があります。そのため同じように、人間の口に近づき舐めようとして飛びつくようになります。

また子犬の時期に飛びつくと、飼い主や他の人が相手をして注目してくれることを学習するため、大きくなっても飛びつくことが習慣化してしまいます。

成犬の飛びつきは、子どもや高齢者にとっては危険ですし、また服を汚すこともあります。

飛びつきの習慣を無くすには、犬が飛びついたら腕を組んで相手をせず、犬に背中を向け、犬が諦めて飛びつくのを止めたら、オスワリなどをさせて優しく褒めて下さい。

また、室内で人がソファーなどに座っている時に飛びつく場合は、だまって立ち上がることを繰り返えし、飛びつかなくなったら褒めて下さい。それでも飛びつく時は、犬を無視して部屋から出て行くようにして下さい。

また来客などに興奮して飛びつく犬に対しては、来客に、犬の目を見ず、姿勢を低くして静かに接するようにお願いすれば、犬も人に飛びつく必要がなくなります。

＜くわえた物を渡す＞

犬はいろんな物をくわえて遊ぶのが大好きです。それが飼い主にとって困るものであれば、つい飼い主は犬に注意したり追っかけたりしてしまいます。これは犬から見れば、飼い主に注目される楽しい遊びになってしまいます。

まずはくわえても良い犬の好きなオモチャなどをくわえさせ、それをおやつや他のおもちゃと交換しましょう。ちゃんと渡したら誉めて、元のオモチャを犬に返します。これを何度か繰り返せば、犬はオモチャを飼い主に渡せば、おやつが貰えたり、またオモチャも返して貰える事を学習し、飼い主が指示すればすぐにくわえた物を渡すようになります。

＜拾い食い＞

犬にとって尿や便は不潔なものだという認識はありません。そのため猫や他犬の糞でも食べられそうな物なら何でも口に入れてしまいます。その行為を防ぐ為には、子犬の時期から拾い食いをさせない練習をすることをお勧めします。

まずは室内で床におやつを置いたり落としたりして、犬に「待て」や「ダメ」、「離れろ」、などの指示を出し、ちゃんと待てたら誉めて、ポケットから別のご褒美を上げて下さい。

そのことを繰り返せば、犬は飼い主の指示を守り、床のおやつを食べなければ、もっと良

いご褒美が貰えることを学習します。
　また時には「ヨシ！」など飼主の指示で、床のおやつや手からのご褒美を食べさせる事も教えましょう。
　そして室内でちゃんと出来るようになったら、外でも同じように練習して下さい。但し外では、犬が飼い主よりも先に食べ物を見つけてしまいますので、当初は飼い主が事前に食べ物を置いておき、犬が食べそうになったらすぐに指示を出すようにすれば、失敗を未然に防げます。

＜お散歩での引っ張り＞
　最初のうちは室内や庭などの安全な場所で、リードをつけずに犬があなたについてくるように教えます。犬が左に離れて行ったらあなたは右に、右に離れたら左にと、犬の気が散って離れても叱ったり、犬の方に近づいて行ってはいけません。その時は犬の名前を呼びながら離れて行って下さい。そして犬があなたに気づいてそばに来たら、その瞬間に誉めておやつをあげて下さい。
　注意して欲しいのは、犬が呼んでも来なかったことを決して怒ったり罰を与えてはいけません。そうすれば犬はあなたのそばに行くと、嫌なことが起こると学習してしまいます。
　これが出来るようになったら、次はリードを付けて右手におやつを持ち、犬をおやつで誘導しながら飼い主の左側を歩かせます。少しでも上手に出来たら誉めながら時々おやつをあげて下さい。
　室内やお庭で引っ張らずに歩けるようになったら、次は公園や家の周りで同じように練習してください。お散歩ではリードを短めにしっかり持ち、犬がリードを引っ張ったら、だまって立ち止まり動かないで下さい。そして犬が振り向いたりリードを引っ張るのをあきらめたら、犬を呼び左側につかせてオスワリをさせ、誉めておやつを与えて下さい。そしてまた一歩踏み出すと、犬は喜んでリードを引っ張りますが、また同じように立ち止まって下さい。
　この動作を根気よく何度も繰り返していれば、犬はリードを引っ張ると行きたい所へ行けず散歩が出来ない事や、逆に、飼い主の動きに注目しリードを引っ張らずに飼い主の横を歩けば、楽しく散歩が出来ることを学習します。
　こうした練習をくり返せば、飼い主が立ち止れば犬も飼主の横で止まり、飼い主の早さに合わせて歩くようになってきます。
※犬にとって散歩は刺激も多く楽しい時間です。散歩中ずっと飼い主の横を歩かせるのではなく、時には犬の行きたいところがあれば、犬にマテやオスワリなどの指示をして、そのご褒美として犬に臭いをかがせるなどの自由を与えてあげるようにしましょう。

＜吠える＞
　犬種の特性や性格などによって吠えやすい犬もいますが、犬が吠え始める原因の多くは、吠える事によって何らかの報酬が得られたり、嫌なことが無くなったりすることを犬が学習しているからです。特に外で飼われている場合、犬は寂しさや退屈などから、通行人や外の状況が確認できないことなどのために、興奮して吠えることが習慣になってしまいます。
　また犬は、吠えれば飼い主が注目してくれたり、おやつや食事が貰えること、散歩に行け

ることなどの要求吠えや、吠える事によって他人や他の犬など、怖いものや嫌なものを遠ざける事が出来ることなどをすぐに学習してしまいます。

この吠え行動に対しては、要求吠えには相手をせずに無視をする、吠えている間は食事も与えず散歩にも行かない。そして諦めて静かになったらすぐに誉めて、食事や散歩など犬の要求を叶えてあげるようにして下さい。

また社会化不足による不安や恐怖心から他人に吠える場合には、相手の人に犬を「見ない・声を掛けない・触らない」ようにお願いし、犬に対して背を向けて、犬が落ちついて、犬の方から相手に近づき匂いを嗅ぎだしたら、飼主さんが犬を優しく誉めたり、相手からおやつを貰うなど、他人との出会いを楽しい経験と関連付るようにして下さい。

また散歩で他の犬を見て吠える場合には、相手の犬が通過する間は、飼い主が犬の視線さえぎり、おやつを匂わせて落ち着いたらおやつを与え、犬との遭遇を楽しい事と関連付ける方法や、吠えたらすぐに後戻りすることを繰り返し、吠えればいつまでも先へ進めないことを教えて下さい。もちろん吠えなくなったらすぐに誉めてご褒美をあげましょう。

但し、犬がチャイムや不審な音などに反応して 2〜3 回程度吠えるのは、それは飼い主にそのことを知らせてくれていますので、その程度の吠えの時は「ありがとう！もういいよ！」と指示をして静かにさせるようしましょう。

＜車酔い・車嫌い＞

犬は車の臭いや揺れ、また車に乗って最初に行く場所が動物病院での検査や予防接種という嫌な経験が多い為、車に乗ると不安になって酔ったり、車に乗ること自体を嫌がるようになります。そんな犬には無理をせず、少しずつ段階を踏んで車に乗ることが楽しいことだと教えてあげましょう。

まずは、車を駐車した状態で車のそばで遊びます。次にドアを開け、オモチャやおやつを使って車内で犬と遊びます。そして車内にいることを嫌がらなくなれば、次はエンジンをかけて同じように行います。犬が慣れてきたら、５分以内で行ける近くの公園などへ行き、一緒に外で遊びます。その後、徐々にドライブの時間や距離を伸ばして、車に乗ることは楽しいことだと関連付けるようにして下さい。また走行中、犬が不安そうにあくびをしたり、よだれを出すときには、犬には声をかけず、安全な場所に車を止めて犬を外で休ませましょう。

※犬を車に乗せる場合は、運転者や犬の安全の為にもケージや犬用のシートベルトを利用するようにして下さい。

＜落ちつかせる＞

一日中興奮して吠え続けたり、イタズラなどをしている犬はいません。普段から、犬が静かに落ちついているときには、「いい子だね」などと優しく誉めて、ご褒美をあげることを心がけて下さい。そうすれば、犬は静かにしている方が良いことがあると学習します。

逆に犬が興奮したり、吠えたり、イタズラをしている時に飼い主も興奮して大きな声で怒れば、犬はさらに興奮してしまいます。そんな時も飼い主が落ち着いて、「静かに！」、「落ちついて」、「いい子だね」などの言葉で犬を落ちつかせてから、オスワリやフセをさせ優しく褒めるようにして下さい。

＜愛犬に言葉（単語）を教えよう＞

愛犬に「オスワリ」や「フセ」、「マテ」などの言葉を教えるのと同様に、例えばお散歩に行く時には「お散歩に行くよ」、「はい首輪」、「リードを着けて」、またお散歩が済んだら、「首輪を外すよ」、「はいブラッシング」、「足を上げて」、「顔を拭くよ」などの他、普段の生活の中でたくさん愛犬に話しかけることを習慣づければ、犬は 100 近くの単語を理解できるようになります。そうなれば、貴方と愛犬との暮らしが今以上にもっと楽しくなります。

１２．犬の健康管理

犬は体調が悪くても、人間のように言葉で伝えることが出来ません。そのためにも飼い主は、愛犬の体の異常を早期に発見し治療できるように、普段から愛犬の状態を良く観察し、ケガや病気を予防するようにして下さい。

ケガや病気の予防や早期発見ができれば、治療が長引かず、愛犬も苦しまず、結果的に医療費も安く済みます。

＜食事の管理＞

犬種、年齢、健康状態、運動量などに合わせて、適切で良質なドッグフードを選んで下さい。またフードに記載された食事量の範囲内で食事回数を決めて下さい。子犬の時期は１日３～４回、成犬では朝夕の２回が一般的です。但し、ご褒美でおやつなどを与える場合は、人間との体重比を考えて、肥満にならないよう与えすぎに注意して下さい。また健康なのに便の回数が増えたり、軟便なった場合は、食事やおやつの量が多すぎることが考えられます。通常健康な犬の便は、手でつかめる程度の適度な硬さです。

※犬にとって危険な食べ物：ネギ類、ニンニク、香辛料、ぶどう、レーズン、キシリトール入りガム他、鶏の骨など

※犬に良くない食べ物：イカ・タコ等の魚介類、カニ・エビ等の甲殻類、ホウレン草、ナッツ類、チョコレート、カカオ、カフェイン入りの飲料、生卵、砂糖、にぼし、海苔など

＜お散歩の効用＞

一日中、室内や庭にいる犬にとって、お散歩はとても楽しい時間です。可能な限り１日朝夕２回はお散歩をさせて下さい。散歩ではいろんな人びとや他の犬などに出会うため、社会性も育まれます。そのためにも、お散歩コースや範囲は時々変えてあげましょう。

また、さまざまな臭いを嗅ぐことで情報収集と同時に犬の本能が刺激されも、ストレスが発散できます。さらに太陽光を浴びることや、季節の寒暖の変化を感じることは心身の健康面でも大変重要です。

＜予防接種・フィラリア予防＞

年１回、法律で定められた狂犬病予防ワクチンの他、かかり付けの獣医師と相談の上、必

要な種類のワクチン接種をして下さい。

居住地域により、蚊が発生した翌月から蚊がいなくなった翌月まで、犬の体重に応じたフィラリア予防薬を投与して下さい。詳しくは担当の獣医師にご相談下さい。

＜日常の健康管理＞

歯：人の唾液は酸性ですが、犬はアルカリ性のため虫歯にはなりにくい反面、歯垢や歯石が出来やすく、手入れをしなければ口臭がひどくなったり歯周病になってしまいます。
それを防ぐ為にも子犬の頃から週に１～２回程度はガーゼや、犬用歯ブラシなどを使って歯を磨く習慣をつけましょう。

耳：特にたれ耳の犬は耳の中が湿り、ダニやカビが発生しやすくなりますので、時々は耳ののお手入れもしてあげて下さい。犬が頻繁に頭を振ったり耳を掻く動作をする時には、耳の中が赤くなっていたり異臭や汚れがないかを確認して下さい。

手足：普段から散歩のあとなどに爪が伸びすぎていないか（特に狼爪）、また肉球などにケガをしていないかをチェックしてあげましょう。

その他：目ヤニなどによる涙やけの手入れや肛門線の膿絞りなど。

※ これらの健康管理は、子犬の時から始めて下さい。犬に恐怖心を与えないように、いきなり行うのではなく、嫌がらない程度から始め、おやつや誉め言葉をかけながら、徐々に慣らしてあげるようにして下さい。

＜ブラッシング・シャンプー＞

ブラッシングは、犬の毛の汚れやむだ毛を取り除き、皮毛を美しく保ち、皮膚に刺激を与え血行を促進する効果があります。毎日のお散歩の後などにブラッシング行うようにすれば、愛犬とのスキンシップもはかれます。

また、シャンプーは犬の汚れ具合に応じて、月に１～２回を目安に行って下さい。頻繁にシャンプーをすることは、皮膚を保護する皮脂や毛艶を無くしてしまいますので気をつけてください。またシャンプーをしたあとは、被毛を十分にすすぎ水分が残らないように乾燥させて下さい。

普段のお手入れは濡れタオルで顔や身体を拭きブラッシングを行っていれば、皮膚の異常やケガなども早期に発見できます。

＜避妊と去勢＞

将来、子犬を産ませる予定が無ければ、獣医師に相談し、早めに避妊や去勢手術をして下さい。そうすれば、飼い主のいない不幸な子犬を増やさずに済みます。

雌は避妊手術をすることで、生理のたびに室内を汚したり、雄犬が発情して近づくことも無くなるので生理中は散歩に行けない、という心配もありません。また子宮や乳腺の病気予防にもなります。

雄は去勢手術をすることで男性ホルモンの分泌が減るため、他の雄犬への攻撃性やマーキングの頻度も減少します。また前立腺などの病気予防にもなります。

また、避妊や去勢をすれば、これらの病気や発情時のストレスが減ることにより、犬の寿命も平均で１年半ほど延びると言われています。

尚、一般的に犬は避妊や去勢をすると肥満になると言われていますが、飼主さんが適度な運動と適切な食事の管理をすれば、ほとんど肥満になることはありません。

＜犬の洋服やアクセサリー＞

犬に人間の子供のように服を着せる飼い主さんがいますが、犬は本来寒さに強く、自然環境に適応できる体を持っています。そのため犬に服を着せると暑すぎたり、体の動きを制限してしまう恐れがあります。犬に服を着せるのは、雨の日のレインコートや冬の寒い日に寒がる時、高齢や病気で体温調整がうまくが出来ない犬、また一時的に抜け毛が落ちるのを防止したいなど、どうしても必要な時だけにしましょう。またアクセサリー類も、犬が誤飲したりして事故につながる恐れもあります。

他にも服を着ていると、犬同士のボディーランゲージが伝わらないこともあります。犬にとっては着飾るよりも犬本来の姿が一番美しく自然だと思います。

１３．飼い主としてのマナー

犬との暮らしは、家庭内に癒しや潤いをもたらすだけではなく、近隣社会とのコミュニケーション作りにも役立ちます。しかし、心無い一部の飼い主が適切なしつけせず、公共のマナーやルールを守らなければ、犬嫌いの人を増やす事にもなります。その結果、マナーの良い飼い主や犬までもが暮らしにくい社会になってしまいます。

そんな社会にならないためにも、犬の飼い主は自分の愛犬の事だけではなく、周囲の環境を護り、ご近所や地域社会に迷惑をかけないよう、飼い主としてのマナーを守ることが大切です。

○　排泄物の処理

お散歩での排泄物は、必ずビニール袋などで持ち帰り、トイレなどで処理するようにして下さい。また他の家の門柱、塀、花壇などにオシッコをしそうな時には、犬を迷惑のかからない場所まで移動させて下さい。また水の入ったペットボトルなどを携帯し、その場所を水で洗い流すようにしましょう。

○　放し飼い

犬を散歩に連れ出さず、犬だけを排便や散歩ために放し飼いするのは止めて下さい。そのことによって犬が道路や他人の敷地に糞便をしたり、車両事故などの危険もあります。また、近隣の住人や他の飼い犬などにも迷惑をかけてしまいます。

○　ノーリード

室内、庭、ドッグランなど、ノーリードが許された所以外では必ずリードを付けて下さい。いくら飼主がしつけの出来ている犬だと思っていても、犬の嫌いな人にはその事はわかりません。さらに他の飼い主や子供などにも、無用な不安や恐怖心を与えてしまいます。

また犬が何かに驚いて急に飛び出したりしても、リードがなければ犬をコントロール出来ずに事故に会う危険もあります。さらに犬が勝手に行動すれば、いつどこでオシッコや排便をしたかも分かりません。首輪やリードは犬の安全のためにも必要なのです。

○　お散歩のマナー

街中でのお散歩ではリードを短く持ち、飼い主の傍を歩かせるようにしましょう。長いリードや伸ばした伸縮リードは見えにくく、通行人や自転車等が引っかかり、事故になる恐れがあります。リードを短めにしていれば、とっさの事故や他人への飛びつきも防げます。

○　飛びつき・むだ吠え

大型犬の飛びつきは、幼児や老人にとっては特に危険です。小型犬でも汚れた足で飛びつかれると衣服を汚してしまいます。また早朝や深夜のむだ吠えはご近所への迷惑になります。これらの問題も、飼い主が犬に正しい方法を理解してしつけをすれば、必ず改善できることです。

○　他犬との挨拶

お散歩中に飼い主と犬同士が出会った時は、相手の同意を得てから、お互いの犬の態度や意思を確認してから挨拶をさせるようにしましょう。

犬にも相性があります。怖がって吠えたり嫌がる犬を無理やり近づけてはいけません。そんな時は、他の犬を見ても落ちついている時にだけ誉めて、徐々に慣れさせて下さい。

※人にも犬にもこれ以上近づいて欲しくないと感じる個体距離（パーソナルスペース）があります。この個体距離は、相手や場所、状況、気分などによっても変わります。

○　生理中のお散歩

雌犬が生理中の時は、近隣の雄犬を発情させ興奮させてしまいます。出来るだけ他の雄犬へ性的なストレスを与えて、他の飼い主に迷惑を掛けないようにしましょう。

雌犬の生理は出血が終わっても１～２週間続きます。その間は、雄犬に近づけたり、犬が集まる場所でのお散歩は避けるようにして下さい。

○　抜け毛の処理

公園など公共の場所では犬のブラッシングは止めて下さい。抜け毛が飛び散ることで、環境を汚し周囲の人を不快にさせてしまいます。また犬の毛は簡単には分解しないので、自宅の庭などで行う時も、抜け毛が飛び散らないよう、ビニール袋などに入れて処理するようにして下さい。

１４．まとめ

気性のおだやかな犬、興奮しやすい犬、内気な犬、積極的な犬など、犬の資質や性格は一頭一頭すべて違います。その為、ここでご紹介した内容がすべての犬に適応できるわけではありません。ご紹介した以外にもさまざまな理論や方法が存在し、今後も新たな発展があると思います。しかし、飼主さんが基本的な犬の習性や心理、行動を理解した上で、それぞれの犬の性格や家庭環境に応じて、飼い主にも犬にもストレスの無い適切なしつけを行えば、大きな間違いがなく、どんな犬にでも一定の成果が得られると思います。

また、犬の社会化やしつけは子犬の時期だけのものではありません。犬も人と同じように生涯学び続け成長しています。

犬は飼い主を選べません！　あなたがその犬を家族として選んだのです！

犬にしつけをしないダメな飼い主はいても、先天的な異常などが無い限り、生まれつき何も学習しないダメな犬はいません。全ては飼い主のしつけ方次第なのです。

飼い犬が起こした事故の責任のほとんどは、飼い主であるあなたが負わなくてはいけません。あなたのしつけ方次第で、愛犬は天使にも悪魔にもなるのです。

どんな人間にも長所や短所があるように、どんな犬にも長所と短所があることを理解し、飼い主が愛犬の長所を伸ばし、短所をできるだけ少なくする努力をすること…。

そのために飼い主は愛犬に対して**「いつも穏やかに、落ち着いて、堂々と」**、**「犬の良い行動を誉め、悪い行動は無視する」**、そして**「あせらず、慌てず、怒らず、諦めず、根気よく、一貫性を持って接する」**。これが犬のしつけの基本です。

愛犬にとっての理想の飼い主とは、自分のわがままを聞いてくれたり、逆にいつも怒る飼主ではなく、**「穏やかで、強く優しく、正しい行動をいつも褒めてくれ、どんな時でも信頼、尊敬できる飼主」**です。

愛犬の可能性を信じ、飼主が根気よく努力をすれば、どんな犬でも最高の家族になります。

あなたもこのテキストを参考に、今日から愛犬と楽しくチャレンジしてください。

愛玩動物飼養管理士 上級・SES ドッグライフカウンセラー・JKC 愛犬飼育管理士
D.I.N.G.O メンバー・日本ペットドッグトレーナーズ協会会員
ジャパン K9 ゲームオフィシャルメンバー
家庭犬しつけアドバイザー　　大津　邦生
〒800-0251 北九州市小倉南区葛原 3 丁目 7-16
TEL 093-474-7716　携帯 090-8395-0099
Ｅメール：ohtsu-k@jcom.home.ne.jp
ウエブサイト:http//wan-kazoku-situke.jimdo.com/
又は「家族としての犬のしつけ」で検索

「家族としての犬のしつけ」は、私の愛犬との暮らしから得た経験や、犬のしつけ、行動学、学習心理などの著名な専門家の方々の下記書籍から得た知識と実践を参考にしてまとめたものです。

犬のことをもっと知りたい・学びたいと考えている方には、これらの書籍はお勧めです。

＜資料・参考文献＞

イアン・ダンバー「子イヌを飼ったあとに」「犬の行動問題としつけ」「ドッグトレーニングバイブル」。ブルース・フォーグル「新版あなたのイヌがわかる本」、」「New dog 愛犬が幸せな家族になる方法」、「新！ドッグトレーニングマニュアル」、「ドッグズ・マインド新装版」。テリー・ライアン「PUPPY BOOK」、「TRAINING TIPS VOL.1」、「Training the Canine Good Citizen」。ジーン・ドナルドソン「ザ・カルチャークラッシュ」。コリン・テナント「ドッグトレーニングブック」。パメラ・Ｊリード「エクセレーティッド・ラーニング」。カレン・プライア「うまくやるための強化の原理」、「犬のクリッカートレーニング」。テゥーリッド・ルーガス「カーミングシグナル」。ヴィベケ・S・リーセ「ドッグ・トレーナーに必要な深読み・先読みテクニック」、「犬に信頼されるテクニック」、「子犬レッスンテクニック」、「いぬ語会話帖」。スタンレー・コレン「犬語の話し方」、「犬も平気でうそをつく」、「相性のいい犬、わるい犬」、「理想の犬の育て方」、「犬があなたをこう変える」。ジュエル・ドゥハッス「うちの犬はおりこうさん」、「うちの子犬は悪い子」、「犬を真面目に考える」。マイケル・W・フォックス「フォックス博士のスーパードッグの育て方」。ジム・エヴァンス「愛犬のトラブル解決ブック」。ジェームス・サーペル「ザ・ドメスティックドッグ」。コンラート・ローレンツ「ソロモンの指輪」、「人イヌにあう」。ジェームズ・Ｅ・メイザー「メイザーの学習と行動」。スティーブン・プディアンスキー「犬の科学」。エーベルハルト トルムラー「犬の行動学」。ジョン・ブラッドショー「犬はあなたをこう見ている」。アンドレ・マクヒュー「子どもと楽しむイヌのしつけ」。シーザー・ミラン「あなたの犬は幸せですか」、「犬と幸せに暮らす方法 55」。テンプル・グランディン「動物が幸せを感じるとき」。アレクサンドラ・ホロウィッツ「犬から見た世界」。西川文二「うまくいくイヌのしつけの科学」、「犬の保育園」。新居和弥「犬といっしょにクリッカートレーニングを始めよう」。堀明「犬はしつけでバカになる」、「イヌの行動　定説はウソだらけ」。D.I.N.G.O.編纂「ドッグトレーナーのためのプロフェッショナル基準」。JAPDT 編「ドッグトレーニングパーフェクトマニュアル」。「もっともくわしいイヌの病気百科　改定新版」。武内ゆかり「愛犬の選び方」。ハイジ「動物と話せる女性ハイジ」。アネラ「犬の気持ち通訳します。」。グレゴリー・バーンズ「犬の気持ちを科学する」。イェシカ・オーベリー「犬と遊ぶレッスンテクニック」。多和田 悟・矢貫 隆「クイールを育てた訓練士」。日本愛玩動物協会動物飼養管理士 1.2 級教本。JKC 会報誌「Gazette」。JPCA 会報誌「with PETs」他著作